

# テーマ 5: 多極化する国際秩序の構築 解答解説

## 模範解答(設問別・3 パターン)

### 問 1(180 字以内)

- **解答 A(標準):** 複雑な国際政治の現実を直視せず、戦争や対立の原因を特定の「悪役」に求め、それを除去すれば平和が得られると考える単純な「善玉・悪玉」的な思考のことである。多層的な利害や価値が絡み合う多極化世界の構造を分析することを放棄し、自らは何も変わらずに済む安易な図式に逃げ込むことで、問題の解決から遠ざかってしまう態度を筆者は批判している。
- **解答 B(論理重視):** 困難な状況に直面した際、特定の勢力を悪役に仕立てて非難することで知的労働を省こうとする態度である。国家が力・利益・価値の複合物であり、複数の正義が並立しているという複雑な事実を無視し、単一の価値観や武力による排除だけで問題が解決すると錯覚することを指す。現状を単純化して捉え、対話や調整という終わりのないプロセスを回避する姿勢である。
- **解答 C(簡潔型):** 平和の問題を、特定の悪を打ち破れば解決するという単純な二元論に帰結させる態度である。現代の多極化秩序において、各国の利益や価値が複雑に交錯している現実を分析する手間を省き、安易な解決策に酔いしれることを指す。これは自分たちの生活や価値観を変えずに済む免罪符として機能するが、実際には新たな対立を生む歴史を繰り返すだけの、知的労働の放棄である。

### 問 2(200 字以内)

- **解答 A(標準):** 冷戦後の米国を中心とする一極秩序が終焉し、その絶対的な統制力が弱まった一方で、それに代わる新たな安定した秩序や主導的な国家が確立されていないためである。グローバル・サウス等の台頭により「力の拠点」が分散し、各国が独自の利益と価値を主張し始めたことで、従来のルールが及ばない空白地帯が生まれている。この一極支配の崩壊と多極化への移行期のズレが、国際的な力の空白を生じさせているのである。
- **解答 B(構造理解):** 米国の一極集中体制が揺らぎ、かつての二極対立のような明確な勢力圏の画定もなされていない中で、各地で既存のパワーバランスが崩れているからである。特定の陣営に属さず、力・利益・価値の三層で個別の戦略をとる国家が増えた結果、大国の影響力が及ばない「力の真空」が各地域に発生している。この真空を巡る覇権争いや、多様な正義の衝突が、国際秩序の不安定化を招く要因となっているのである。
- **解答 C(簡潔型):** 冷戦後の一極支配が終わりを告げ、世界の統治空間を支えていた絶対的な力が減退したためである。同時に、独自の価値の体系を持つ多極的な勢力が台頭し、既存の国際秩序の枠組みが機能不全に陥っていることが挙げられる。この権力の空白

地帯において、力による現状変更や利害の衝突が制御不能となっており、新たな均衡点が見出されるまでの過渡的な「力の空白」が生じているためである。

### 問 3(600 字以内)

多極化が進み、力・利益・価値の三層で複雑な対立が生じている現代において、日本が果たすべき役割は、異なる「正義」の間を調整し、対立を「管理」する触媒となることである。

具体的な事例として、ASEAN 諸国と日米豪印(QUAD)の連携調整が挙げられる。東南アジア諸国は、経済的には中国という「利益の体系」に深く依存しつつも、安全保障という「力の体系」においては米国や日本との協力を求めている。ここで「民主主義か専制主義か」という単純な「価値の体系」による二元論を迫ることは、かえって地域の分断を深め、安定を損なう「知的な怠惰」である。

日本は、欧米的な価値観を共有する立場でありながら、アジアの一員としての歴史的経験を背景に、各国の固有の「常識」や利益の所在を理解する立ち位置にある。したがって、唯一の正義を押し付けるのではなく、複数の正義が並立する現実を前提に、インフラ整備や環境協力といった共通の「利益」の層を広げることで、価値のレベルでの衝突を緩和する役割を担うべきだ。

平和とは、悪役を排除した後の静寂ではなく、多極化する国家間の緊張を暴力に訴えずに管理し続ける動的なプロセスである。日本は自らの自画像を「多層的な調整者」として描き直し、複雑な利害関係を解きほぐす粘り強い知的労働を主導することで、新たな国際秩序の構築に寄与すべきである。

## 採点のポイント・解説

1. 問 1: 「悪役の除去＝知的労働の放棄」という構成を正確に説明できているか。
2. 問 2: 米国の一極支配の終焉と、勢力分散による「既存ルール機能不全」に触れているか。
3. 問 3: 日本の役割を「二元論(踏み絵)の回避」と「利益を通じた価値の衝突緩和」として論理的に提示できているか。